

令和元年度血液凝固異常症全国調査のまとめ

令和元年度の血液凝固異常症全国調査は1,223施設(1,404担当部所)に調査用紙を送付し、令和元年5月31日時点における状況を報告していただくよう依頼した。調査対象期間は平成30年6月1日から令和元年5月31日までの1年間である。調査の実施に当たっては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(平成29年2月28日一部改正)」を遵守するよう配慮した。

令和元年5月31日現在で集計した日本全国に生存する血液凝固異常症の総数は、下表に示すように9,013例(HIV非感染8,297例、HIV感染716例)となった。このうち、小児の血液凝固異常症の総数は1,378例であった。

日本全国における血液凝固異常症総数

	血友病A	血友病B	VWD	類縁疾患	小計
HIV非感染生存	4,869	1,021	1,356	1,051	8,297
(男性)	4,815	996	605	509	6,925
(女性)	54	25	751	542	1,372
HIV感染生存	541	165	7	3	716
(男性)	541	165	2	0	708
(女性)	0	0	5	3	8
HIV非感染・感染生存合計	5,410	1,186	1,363	1,054	9,013
(男性)	5,356	1,161	607	509	7,633
(女性)	54	25	756	545	1,380
AIDS発症(生存)	128	42	2	0	172
(男性)	128	42	0	0	170
(女性)	0	0	2	0	2
HIV感染死亡(累積)	547	160	1	9	717
(男性)	545	158	1	7	711
(女性)	2	2	0	2	6
HIV感染総数(生存および累積死亡)	1,088	325	8	12	1,433
(男性)	1,086	323	3	7	1,419
(女性)	2	2	5	5	14

VWD : von Willebrand病

AIDS発症: 治療により症状が消失したり、検査所見が改善したものも含む。

調査期間におけるHIV非感染の死亡報告は19例、HIV感染の死亡報告は3例であった。このうち、報告された死因の中にHCVの感染が原因と考えられる重篤な肝疾患が含まれていたものは、HIV非感染で6例(5例は主たる死因、1例は死因に併記)、HIV感染で1例であった。

C型肝炎の治療薬として平成26年秋より登場した直接作用型の抗ウイルス薬については、インターフェロン/Pegインターフェロンあるいはリバビリンとともに併用する使用報告例はなく、インターフェロンを併用しない使用報告数が28例(HIV非感染18例、HIV感染10例)であった。

HIV感染症例においては、新たなAIDS発症例は報告がなく、また、死亡時にAIDS指標疾患の罹患があった報告はなかった。さらに、今年度のCD4陽性リンパ球数の平均値は528/ μ L、HIVのRNAコピー数は検出感度未満の割合が86%と、HIVに関しては比較的良好な状態が保たれている。

これまでの調査に引き続き、治療を要する糖尿病、高血圧、高脂血症、あるいは頭蓋内出血の既往歴に加え、慢性腎臓病(CKD)および骨粗しょう症の状況と、喫煙についても調査した。頭蓋内出血が起こった年齢に関しては、昨年度と同様に詳細な集計を行った。

また、血液凝固異常症のQOLに係るインヒビター、家庭療法、定期補充療法、さらに、凝固因子製剤の使用状況についても引き続き集計を行っている。

血液凝固異常症全国調査は本邦における血液凝固異常症の全体を調査対象とし、その現状および問題点を把握するための唯一の調査であり、今後も調査票の回収率の向上に努めつつ、慎重な調査を継続していきたい。